

## 茶道書にみる茶道研究の概説

安 部 直 樹

### 要 旨

茶道の研究はさまざまな角度からなされている。茶の栽培・製造・茶の歴史、茶道の歴史、茶人論、茶道思想論、文化論、茶会記などの研究として結実してきている。したがって、茶道書もこうして研究動向によってさまざまな角度から取り上げられているのである。ここでは一般的に茶書および茶道研究として認知されたものを取り上げ、茶道研究の動向を概観した。

### キーワード

茶道発祥、茶道歴史過程、茶の湯概要、茶人論、茶道論、茶文化論

### はじめに

茶書と呼ばれるものを網羅的に収録したのは、『茶道古典全集（全12巻）』（千宗室編、淡交社、1956）であった。『茶経』『茶録』『大観茶論』『勅脩百丈清規』などの中国の茶書から『喫茶養生記』『喫茶往来』などの日本の茶書にいたるまで、その収録茶書は多岐にわたっている。室町時代の故実書である『君臺観左右帳記』や同朋衆の口伝書であった『御節書』、さらには村田珠光の『心の師』なども収録されている。さらには、利休や紹鷗にふれ『山上宗二記』や刊本茶書第一号として知られる『草人木』、公家茶について知ることのできる『槐記』や茶会記として著名な『松屋會記』、茶道と禅との関係を記した『茶禅録』なども納められている。これまでの茶道研究について集大成を試みたものとして千宗室の監修した『茶道学体系（全10巻）』（淡交社、1999～2001）がある。1巻から9巻までに、茶道文化論、茶道の歴史、茶事、茶会、懐石と菓子、茶の美術、茶壺、露地、東洋の茶、茶の湯と科学、茶と文芸といった各テーマにそった研究論文が収録されている。

### 中国の茶書

茶の木が歴史上登場するのは中国であり、中国が茶の木の発祥の地である。この点よりまず中国の茶をとり上げた。しかし、茶道研究の動向は多様であり多彩である。茶の栽培・製造・伝播の研究、茶道成立史研究、茶道と宗教とのかかわりの研究、茶道点前の研究、茶器の研究、茶室の研究といったぐあいに、研究の方向性や対象は多岐にわたっている。それぞれの研究が、茶道の輪郭をとらえるために真摯に考究されていて示唆に富んでいる。茶道の全貌を捉えるための基礎固めとして古典文献の集大成をはじめて試みようとしたのは、昭和31年（1956年）に千宗室編と銘打って一気に刊行された『茶道古典全集（全12巻）』<sup>1)</sup>においてであった。この『茶道古典全集』の刊行によって、古典文献の探索が容易となり、茶道研究が急速に深化していくのである。茶道研究のおおよその外郭は『茶道古典全集』によって知ることができる。以下これに基づいて、茶道研究の主要なテーマや視点を撰観してみよう。

茶の栽培・製造・伝播について言及した古典的文献としては、陸羽の『茶経』<sup>2)</sup>を挙げなければ

ばならない。最古の茶の本といわれている『茶経』によれば、「茶というものは南方の嘉木である(茶者南方之嘉木也)」<sup>3)</sup>とされる。また、『茶経』には本草学との関係をうかがわせるような、

「茶の効用は、味が至つて寒である。飲用として、行い精れ俟徳な人に最もふさわしい。若し熱渴き凝悶になり、脳疼し目が溢き、四支がけだるく煩み、百節が舒びやかでないときに、まあ四五杯も啜めば、醍醐や甘露と抗衡うような味がするものである」<sup>4)</sup>

という記述もある。さらに、神田喜一郎『『茶経』解題』<sup>5)</sup>によれば、「陸羽の唱えた茶道は、いわゆる團茶の法である。これは一に餅茶とも茶團ともいう。陸羽は、團茶の造り方、その煮方、及び飲み方、の三事と、それに使用する道具のことを委しく述べているのである」<sup>6)</sup>として、茶道来歴の端緒が示されているのである。

この『茶経』にはじまり『茶録』『大観茶論』『勅脩百丈清規』なども『茶道古典全集(第1巻)』に納められている。政治家、文学者そして書家でもあった蔡襄によって書かれた『茶録』<sup>7)</sup>は、宋代の治元元年(1064年)に著されたもので、茶の色、香、味からはじまり茶の藏えかた、茶の炙りかた、茶の碾きかた、茶の羅かた、茶の点てかたから茶器までを論ずる書である。神田喜一郎『『茶録』解題』<sup>8)</sup>によれば、「唐の中葉以来、中国における飲茶の風習はますます盛んになってきたが、それと共に製茶の方法や点茶の方法にも、いろいろ進歩改善が加えられてきた。そこで陸羽の『茶経』がいかによつて茶の道の教典であつても、やはりそれに満足できないで、新時代に即応したところの茶の道の書が要求されるようになった。そうした要求に応じて現われたものに、先づ第一に宋の蔡襄の茶録がある」<sup>9)</sup>として『茶録』は位置づけられている。宋代の茶書として『茶録』に次い

で著名なものが、宋の徽宗皇帝の書と伝えられている『大観茶論』<sup>10)</sup>である。『大観茶論』では、茶の栽培方法、茶の摘み方、茶の製法、蓋(ちやわん)や筥(ちやせん)についての記述がある。特筆すべきは、茶筥について触れている最古の文献だという点である。大観とは徽宗の治世の年号であり、1107年から1110年に至るわずか4年間の年号でもあった。『大観茶論』は徽宗治世の初期のころの作品であるといわれている<sup>11)</sup>。

『勅脩百丈清規』<sup>12)</sup>は「宋の『禪苑清規』『叢林校定清規總要』、元の『禪林備用清規』等を参照折衷集大成し、百丈の『古清規』に倣つて上下二巻とし、『古清規』を校訂刪修したという意味で『百丈清規』といい、之に勅脩の二字を加えた」<sup>13)</sup>のものであるとされている。また、朝廷、國恩、佛恩、佛誕生、佛成道、佛涅槃にあたって報恩底の精神を高唱し、さらに達磨忌、百丈忌、開山忌、嗣法師忌等をあげ、住持の僧の日用行事を示し、さらに湯茶煎茶の法式等にも言及している<sup>14)</sup>。

## 日本の茶書

### (1) 初期の茶書(栄西より紹鷗まで)

日本に最初の茶の種を持ち込んだのは、栄西禅師(1141年～1215年)といわれている。栄西の著書『喫茶養生記』<sup>15)</sup>は、日本で書かれた最初の本格的茶書でもある。この書は特に茶の医学的効用を説いたもので、初治本と再治本の二種がある。初治本は承元5年(1211年)、再治本は建保2年(1214年)の序のあるものである。『喫茶養生記巻上』は主に五蔵和合の中心を心臓におき、五味のなかで心臓に対応するものが苦味であるところから特に茶を飲用すべきことを説いている。また『喫茶養生記』は、「茶 苦味 心臓強化 五臓調和 延命長壽」という図式を立てるとともに、茶を飲む中国人が、茶を飲まない日本人より長壽である事実を指摘し、あわせて22種の中国文献を巧みに配列して茶に関する一般的知識を提供している」<sup>16)</sup>とされ

る。

茶道研究において『喫茶養生記』と同列に言及されるのが、室町時代の始め頃、玄恵法師が著したといわれている『喫茶往来』<sup>17)</sup>である。この書には、日本で用いられた茶筴のこと、鎌倉時代末期から起こって南北朝時代に盛んとなった遊興の茶のこと、柊尾の茶を第一として尊重していること、唐様の茶会の次第や茶亭並びにその内部の装備が完全な唐様趣味であることなどが記されている<sup>18)</sup>。

この『喫茶往来』には、思恭や牧溪の描いた墨絵、胡銅の花瓶、鍬石の香匙、火箸、さらには堆朱、堆紅の香箱、茶壺も登場する。珍菓、屏風、茶筴等、後の茶道の道具が徐々に取り揃えられようとしているようすも窺える。奈良時代の入唐帰朝の僧である永忠が茶に深く関わり、団茶の法を伝えたことにより、室町期に至ってもなお茶湯の会は中国式の喫茶に拘泥した。「茶湯の会は、全く中国の天地に彷徨し、中国人の生活気分に浸りながら茶を喫したのであって、その茶の品種を喫み分け、その善悪を批判することに重きをおいたものであった」<sup>19)</sup>という。

さらに茶は、栄西禅師の抹茶の法による菓としての用法から、やがて武士階級による本茶と非茶の当て競べをする娑婆羅の茶、すなわち闘茶へと発展していくのである。戦乱の世をくぐり抜け、権力と富を手中にした武士は闘茶に熱中した。この闘茶から足利三代將軍義満の時代に北山文化、さらに八代將軍義政の時代に東山文化が開き、能阿弥、芸阿弥、相阿弥らの同朋衆によって茶の原型が出来上がっていく。第一に茶礼の形を整え、第二に道具があつまり、第三に会所座敷がつくり上げられていくのである。ようやくこの三つが、それなりの形を整えてきたのだが、室町幕府の殿中や有力武将の邸宅において座敷飾に当たったのがこの同朋衆であった。座敷飾の規矩や慣習を記した故実書に『君臺觀左右帳記』<sup>20)</sup>がある。『君臺觀左右帳記』は、宋、元を中心とする150人前後の中国

画家の画人録と座敷飾（床飾、棚飾、書院飾）や器物（彫物、胡銅の物、茶坑物、土の物、葉茶壺、抹茶壺等）の説明からなっている。このことから谷信一は、『君臺觀左右帳記』の書名にある「左右帳記」を「君臺觀の左と右の帳記、即ち前編と後編の二部の記」<sup>21)</sup>であると解釈している。茶は、禅院茶礼式立礼から坐礼に移り、書院茶となっていく。その書院茶の初期の特徴を記したものが『君臺觀左右帳記』であるともいえよう。

この書院の茶をさらに詳しく書いたものが『御節書』<sup>22)</sup>である。『御節書』は、室町幕府の足利義政に同朋衆として仕えた相阿弥による口伝書であったものが江戸初期万治3年（1660年）に刊行された。『御節書』は、東山殿の座敷飾について詳述している。『御節書』には、「現存の東求堂の實際や蔭涼軒日録などの記述と一致するものが、二三存する」<sup>23)</sup>とし、三具足の香合の使い方をはじめ、掛軸、花瓶、香爐、硯屏等の飾り方等も記している。

同朋衆によって茶の原型ができあがっていくのだが、茶に禅の精神を取り入れたのは村田珠光であった。珠光により、茶は茶道という形を整えていくのであり、その意味で茶道の歴史における珠光の影響は欠かすことはできない。村田珠光は奈良に生まれ、京都で商人として大成し、隠居して郷里の称名寺にて仏門に入ろうとしたが、茶で身を立てようと京都に上った。珠光を有名にしたのは、珠光が大和の文化大名であった古市播磨律師澄胤（1459年～1508年）に与えた数寄の文「心の師」<sup>24)</sup>によってであった。しかしこの文、つまり「珠光古市播磨法師宛一紙」が珠光自身の筆になるか否かについて真偽のほどは確かではない<sup>25)</sup>。珠光につづいたのが武野紹鷗（1502年～1555年）である。堺の商人で連歌に秀で、茶の湯を学び、わび茶の道を求めた。紹鷗について『山上宗二記』<sup>26)</sup>では、

「紹鷗八五十四ニテ遠行、茶湯八正風体

盛リニ 死去也。物ニタトヘハ、吉野ノ花  
盛過テ夏モ過、秋ノ月、紅葉ニ似リ」<sup>27)</sup>

と評している。この紹鷗の記したものが「又十  
體之事」である。これに「紹鷗門弟への法度」  
「池永宗作への書」を加え『紹鷗遺文』として  
まとめられている<sup>28)</sup>。

## (2) 千利休時代の茶書

茶の完成者は、千利休（1522年～1591年）で  
あるといっている。彼は北向道陳や武野紹鷗に  
茶を学んだ後、自らの創意工夫を加えて利休独  
自の茶風をつくりあげた。彼の茶風は、それま  
での唐物の茶からわび茶への転換であるといえ  
ることができる。織田信長、豊臣秀吉に仕え  
た経緯から、茶を日本における固有の文化・精  
神を体現したものと解した。千利休の著書は  
残ってはいないが、千利休の言動を書き綴った  
ものとして、南坊宗啓の著書『南方録』<sup>29)</sup>が残  
存する。この『南方録』は茶の湯の心得として  
の「覚書」、利休の行った茶会記である「会」、  
茶湯空間を詳述した「棚」、書院飾りの「書院」、  
台子手前の「台子」、曲尺割を説いた「墨引」  
と補述として茶祖利休への思いをこめた「滅  
後」の七巻にまとめられている。異説もある  
が、歴史的には六巻までは利休の言動である  
という見解が定着している。また、利休は数多  
くの茶会を催し、そのひとつひとつが格調高く、  
趣深いものであった。利休の茶会をまとめた  
ものが『利休百會記』<sup>30)</sup>である。

利休の茶を学び実践し、社会に広める役割を  
果たしたのが豊臣秀吉に他ならない。権勢並び  
立つものがない豊臣時代に、利休の茶を範と  
した秀吉に追従するかのようになり、多くの大名、  
武士、町人が茶道へと導かれていった。秀吉の  
茶への情熱を表したのが、『北野大茶湯之記』<sup>31)</sup>  
である。この茶会は「北野の森に茶湯に関心  
のある者は身分の上下を問わず誰でも参加しな  
さい」という趣旨のものであり、そこでは茶道具  
も名物を披露するが、「釜一、つるへ一、呑物

一、茶なきものは、こがしにても不苦候」<sup>32)</sup>と  
もいう。当日は、千五六百の茶店が出たとい  
うことであるが、当初10日間の予定であったも  
のが1日で終わったことについての原因は定か  
ではない<sup>33)</sup>。

千利休の弟子には多くの茶人がいたが、山上  
宗二（1544～1590）は、その代表格であつた  
ろう。山上宗二は、秀吉の命によって斬刑に処  
せられるのであるが、利休に親しく仕えていた  
間に見聞きしたことに自分の経験を交えて『山  
上宗二記』を書き残したのである。多くは、茶  
器の鑑賞に関する内容であるが、「茶の湯者覚  
悟十体」では、茶の湯の心得を述べている。『山  
上宗二記』に原本はなく、桑田忠親は、「現存の  
寫本には天正十六年、又は天正十七年の奥書  
があり、利休晩年の記録であることが明かな  
点、利休當時の茶道を極める上に最も確實性  
に富む茶書といわねばなるまい」<sup>34)</sup>という。

織田信長、豊臣秀吉を茶の道へと誘った茶人  
は多かったと考えられるが、神谷宗湛（1551  
年～1635年）もその一人である。宗湛は、信  
長との交わりをもち、本能寺の変では、同郷の  
商人島井宗室とともに現場に居合わせた。秀吉  
とも密接な関係をもち、大阪城で催された秀吉  
の茶会に招かれている。宗湛は、『宗湛日記』<sup>35)</sup>  
を残したが、そのなかで秀吉自らの接待を受け  
たことを記している。特に、「文禄五年（1596  
年、10月には慶長元年と改元）には、三月上  
洛して秀吉の正室北政所に招かれたほかには注  
目すべきことも格別ないが、翌慶長二年（1597  
年）には正月に上洛して伏見城における秀吉の  
朝茶会に招かれ、今井宗薫、千紹安、前田利家、  
宇喜多秀家、上杉景勝らの響應を受けて帰国  
し、ついで朝鮮再征のため西下した諸将の接待  
にあたった」<sup>36)</sup>ことは注目される。

寛永元年（1623年）6月の筑前藩主黒田忠  
之から宗湛への手紙で、五百石の知行地と黄金  
千両で家宝である博多文琳を召上げる旨伝えら  
れた<sup>37)</sup>。宗湛にとってその胸中は複雑きわまり  
ないものがあつたであろうことは想像に難くな



い。「宗湛の生涯は、単に茶道史上に興味あるだけでなく、一旦は自治都市を建設して、萬丈の気をはき、やがて封建的重壓に屈服させられた中世末期から近代初期にかけての町人の運命の縮図ともいうべきもので、その記録である『宗湛日記』の価値は、そこにも見出されるべきである」<sup>38)</sup>とする芳賀幸四郎の『宗湛日記』に対する評価は首肯できる。

### (3) 千利休後の茶書

現在知られている刊本茶書の第一号が寛永3年(1626年)に出された茶書『草人木』<sup>39)</sup>である。筆者は明らかなでない。もともと茶という文字は艸・人・木で構成されているところから、書名『草人木』は文字の構成よりつけられたものであることが了解されよう。『草人木』は茶の実習書であり、上巻では各種茶会法で心得ておくべきことが百一条にまとめられ、中巻では「座敷之図」、下巻では「台子之沙汰」などが図をもって詳述されている。

茶をこよなく愛する滌煩子と酒をこよなく愛する忘憂君とが論争し合うという想定で天正4年(1576年)に書かれた『酒茶論』<sup>40)</sup>において、滌煩子の言として「すべてこの天地間に生れ出たものは、人間と禽獣と山や川、草や木の類であります。がその中で人間が一番貴いのです。いま茶の字を分析してみますと、人が草と木との間にあるように出来ています。あなたは酒は、水辺の鳥(酉)だとたえまきすけれど、禽獣などがどうして人間にかなうものですか」<sup>41)</sup>とあり、茶のことを「草人木」という謂われが述べられている。この『草人木』は利休没後30年目に版行されたところから、利休以来の古則を古織(古田織部)の名を冠して取り上げることににより一種の権威付けをはかったものと考えられる。利休が茶道を大成し、その後に続く利休七哲のなかで、古田織部の影響が大きなものであったことがこの『草人木』よりうかがえるのである。

江戸時代も半世紀以上すぎると町人・武家の

台頭によって、公家貴族の生活はきびしくなっていた。この時代、英才家で達識者としても知られる前摂政予楽院近衛家熙(1667年~1736年)の言動を、家熙の侍医山科道安が忠実に記述したのが『槐記』<sup>42)</sup>である。『槐記』は、家熙の老成時代の風雅を語り、内容としては、詩歌、書画から多方面にわたる。わけでも茶道・香道・華道が語られ、特に茶会の記録が多い。家熙は、「そのひろい和漢の教養をもとに、公家文化の生命であった尊貴の観念と利休によって大成されたわび茶の精神とを統合して、茶道史における新境地を開拓し、いわば新しい公家の茶道を生み出した」<sup>43)</sup>のである。享保15年(1730年)4月15日條に、

「常門ノハ、白張二限レリト仰ラル、是等モ常門ノ圍居ニ、反古張ノアルベキヤウナシ、御前ナドハ、反古張ナドハ有ベカラズト申セシナラン、今日ニテモ、反古二限ルト思フモ亦非ガ事ナルベシ、兎角雙方向同ジカラザルヤウニ色違ヒカ、異ナル紙ニテアルベシ」<sup>44)</sup>

と述べている。この意味は柴田實によれば、「家熙の属する常修院宮門では、宮家であるので圍居の中に張る反古紙などあるべき筈がない。今日でも反古紙に限ると思うのは僻事である。勝手口・亭主口の双方は色違いか或は異った紙で張ったらそれでよいのだという意味であって、宗和のこの示教が『わび』より『景氣』を求めるものであったにしても、この家熙の考えは、彼の属する常修院宮門の茶湯が、公家の茶として高雅さを要求していたことを物語っていると言い得よう。従って、簡素の中に一筋のわびを求めた世間流の茶、すなわち庶民の茶道と、公家の茶道であった彼の茶は、その本質に於て、極めて微妙な點で相違し、或る意味では対照的であったとも言える」<sup>45)</sup>とされる。

さて、わび茶としての村田珠光の奈良の茶

は、奈良の漆師、松屋によって受け継がれた。松屋源三郎三代にわたる茶湯他会記である『松屋會記』<sup>46)</sup>において珠光直系を誇った。松屋源三郎三代とは、松屋源三郎久政・源三郎久好・源三郎久重の三代をいう。「松屋はいわゆる松屋三名物（除熙筆鷺繪・肩衝・存星盆）襲蔵の名家であり、珠光の道統を以て世に重んぜられた。とくに鷺繪は利休によって数寄の極意の具現と推されたといわれ（例えば速水宗達の喫茶明月集）武家はもとより、寛永三年（1706）五月には靈元上皇の上覧に供されたという由緒にかざられている。三名物と珠光の道統とを保持するがゆえに松屋は斯界に重きをなした。その松屋の記念碑ともいうべきものが、この松屋會記である」<sup>47)</sup>と位置づけられよう。120年にもわたる茶会記が綿々と綴られるという例はさほど多くはない。きわめて貴重な史料だといえることができる。とりまとめたのは松屋源三郎久重といわれている。その編集方針を永島福太郎は、「久重はそれの茶説を示すことを目的とし、家傳の自他會記や、自身の記憶を資料として、利休傳・織部傳・三公説・宗甫傳の四冊一部を編集している」<sup>48)</sup>と記している。

#### (4) 茶と禅

わび・さびの境地は悟りの境地に似ている。珠光・紹鷗・利休とつづくわび茶の系譜が禅道に通じているということがそれを示している。その証左は茶道文献の各所にみえる。その代表的なものを示しておく。

「茶湯ハ禅宗ヨリ出タルニ依テ、僧ノ行ヲ専ニスル也、珠光・紹鷗・皆禅宗也」  
『山上宗二記』<sup>49)</sup>

「小座敷の茶の湯は、第一佛法を以て修業得道する事也、家居の結構、食事の珍味を樂とするは俗世の事也、家八もらぬほど、食事ハ飢えぬほどにてたる事也」  
『南方録』覚書<sup>50)</sup>

「サテ又佗ノ本意ハ、清浄無垢ノ佛世界

ヲ表シテ、コノ露地・草庵ニ至テハ、塵芥ヲ拂却シ、主客トモニ直心ノ交ナレバ、規矩寸尺、式法等、アナガチニ不可云」『南方録』滅後<sup>51)</sup>

この点を強烈に意識し、茶道と禅との関係を記したものに、『禅茶録』<sup>52)</sup>がある。『禅茶録』冒頭はつぎのように始まっている。

「喫茶に禅道を主とするは、紫野の一休禅師より事起れり、其ノ故は、南都称名寺の珠光は、一休禅師の法弟なり、茶事を嗜て日に行ひけるを、一休禅師見たまひて、茶は仏道の妙所ニモ叶ふべき物そとて点茶に禅意を写し、衆生の為に自己の心法を觀せしむる茶道とは成り、故に、一切茶事にて行ひ用ふる所、禅道に異ならず」<sup>53)</sup>

これを受けて柴山全慶は「禅茶録解題」で、「徹頭徹尾『禅茶の道』を主張した茶書であり、徳川期にものせられた禅的茶論の中にあつて、最も整った体系をもつ茶論であり、ややもすれば、単なる茶礼茶儀に流れ去らんとする茶道界に、意義深い内面的指針となる一書である」<sup>54)</sup>と『禅茶録』を絶賛する。

#### 茶道研究の展開

茶道研究を網羅的に記述したものとしては千宗室の監修した『茶道学大系（全10巻）』<sup>55)</sup>がある。各巻ごとにテーマを設けてそのテーマにそつた論文を集積した『茶道学大系』は、茶道についてのさまざまな側面からの考察がなされているという意味で、現時点における茶道研究の集大成といつていい。各巻のテーマは、第1巻：茶道文化論、第2巻：茶道の歴史、第3巻：茶事・茶会、第4巻：懷石と菓子、第5巻：茶の美術、第6巻：茶室・露地、第7巻：東洋の茶、第8巻：茶の湯と科学、第9巻：茶と文芸、別巻：海外の茶道、となっている。こ

ここでは各巻に納められている論文のいくつかをとりあげ、これまでの茶道研究の輪郭を描き出してみた。

第1巻は、茶道文化の歴史的分析、茶道文化の現代的分析、煎茶文化論の3部構成となっているが、まず茶道とは何かという切り口からの茶道論、宗教と茶道、中世文化と茶道、そして茶道文化の文明史的な意義を問う等という論点からのものである。

第2巻では、茶道史研究の第一人者である谷端昭夫による茶道研究史の概観として、谷端昭夫「茶道史研究の歩みと展望」<sup>56)</sup>が、これまでの茶道研究をふりかえろうとするとき、きわめて便利である。「茶道史研究の歩みと展望」において、谷端昭夫は定期的な文献目録の作成作業が茶道研究における基礎作業として不可欠であるにかかわらず、遅々として進んでいない点を指摘する<sup>57)</sup>。そうした基礎作業を欠いてはいるが、確実に茶道研究は進んでいる。本巻では茶道研究の対象領域を、公家の茶の湯・武家茶道・豪商の茶の湯・地域茶道の四領域に分かっている。茶道のあり方である、公家茶・武家茶・町人茶の三領域とその地域伝播による地域独自の茶が考察対象になることを示しているのである。とりわけ武家茶は主従関係の確認作業の場としての機能を内包していたという意味で興味深いものがある。矢部誠一郎「近世大名茶の湯の展開 佐竹義宣と細川忠興」<sup>58)</sup>では、大名の生活に浸透した茶の湯というのは、「教条的で観念的な茶の湯よりも、生活に密着した、必要不可欠な茶の湯が展開した」とし、「江戸時代の将軍が各大名に頻繁に行った茶の饗応は、招かれた武士にとっては、服属儀礼として招請を断ることなどはできるはずもなかった」のであるし、「武士の教養、趣味という程度のもものでは勤まらなかった」ものであったことを指摘している<sup>59)</sup>。そうした視点から大名茶を分析した結果、つぎのような結論に達している。

「大名という地位は若くして多くの茶人

に接することができたし、武士の交流の舞台として、茶会が極めて重視されてきたことを見ることができた。武士の茶の湯は、精神的な涵養のみではなかった。武士とは政治的に、商人である茶人とは経済的に繋がりを持つことが、ともかく必要であった。それは戦国期、江戸時代を問わなかったであろう。これらの武士は将軍、大御所を頂点とする階級の中央にあって、幾重にも深い人間関係を築く必要があった。その関係を造る場を提供する、いわば社交・儀礼の場としても武士の茶会が持たれた。それを指導した古田織部は、佐竹義宣にも細川忠興にも大きな影響を与えてきた。それは織部が將軍家茶の湯指南になる以前からのことであって、古田織部の茶の湯界における力の大きさに今更ながら感嘆せざるをえない。織部は後に罪を負って自害するが、その罪はほとんど利休と同様のものではあったろう。単に大阪内通だけではなく、地位の低いものが権力に接近しすぎたための運命のようなものすら感じるのである。流派も家元もない時代に織部も義宣も忠興も自由に生きた。大名の茶の湯は自由であり闊達であった。武家の茶の湯の本領はそこにあった」<sup>60)</sup>

きわめて示唆的な結論であるといわねばなるまい。

第3巻は茶事・茶会についてあらゆる角度から考察をしている。上記引用文中に武家茶における茶会の重要性の指摘があるが、その点をさらに深く追求した論文として、渡辺保「茶事の演劇性」<sup>61)</sup>がある。渡辺保は「茶の湯の核心は、亭主の演技である」<sup>62)</sup>と言い切る。つまり、

「茶室という舞台、そこに飾られた装置、さまざまな演出、主人によって演じられる一夕の演劇といつていい」<sup>63)</sup>

というのである。ところが茶の湯と演劇とではある一点でまったく異なっていると渡辺保は指摘する。演劇では演技者が勝手に思索し、思想の自由を表明してはならない。茶の湯空間においては、演技者が勝手に思索し、思想の自由を満喫する。

「利休は皮肉にも『茶を喫するまでのこととなり』(滅後二)といった。外見上の目的はそこにつける。そこではなにを考え、なにを思うかは、各個人のものであって、ふれるべきではないと思ったからだろう。それが人間の面白さであり、思想の自由ということだろう。利休はその自由を見たから、全ての規矩をこえて自由でありたいと思い、それを身体化することが、この道の極致だと思った。自由も思想もまた身体から生まれるのである。それが空白の意味である。」<sup>64)</sup>

思索装置としての茶の湯空間理解について言及し、これまでの茶道研究にみられない斬新な切り口をみせているのが、上記引用文である。

第4巻では、これまで茶道研究においてまったく言及されることのなかった懐石と菓子について解明しようとしている。筒井紘一「茶の湯の菓子 その成立と展開」<sup>65)</sup>では、『菓子』と称する呼び名には二通りの状況が考えられることになる。その一つは純粋に喫茶のための菓子＝茶事において薄茶を飲むために食べる干菓子(惣菓子、後菓子とも称する)。いま一つは食事に付随した菓子＝茶事において懐石料理のあとに出される菓子、の二つである<sup>66)</sup>という。

第5巻では茶道具をとりあつかっている。茶道具の変遷、茶道美術研究史、茶陶、茶掛、唐絵、漆器、染織、国焼、瀬戸茶入、唐物茶入、京焼、御用窯、御庭焼、茶釜などから茶道美術の特質を明らかにしようとしている。

第6巻は建築学からのアプローチである。建築学の学問的蓄積に裏打ちされた茶室研究は多

彩である。茶室のなかでも武家の茶室に着目した中村利則は「武家の茶室」<sup>67)</sup>で、「十六世紀後半以降、茶の湯が政治の表舞台で重要な位置を占めてきた。支配層たる武家の間でも茶の湯が流行し、それぞれに茶室が好まれてもいたが、これまでの茶室研究において、武家の茶室といえば古田織部、織田有楽、細川三斎、小堀遠州、片桐石州、松平不昧など、概して茶匠として名をなした人たちの茶室であり、その造形性が中心に論じられてきた」<sup>68)</sup>と、これまでの研究を総括する。そのうえで、「ここでは高名な茶匠の茶室を離れ、武家においてどのような環境に茶室が建てられ、茶の湯が武家の生活のなかにどのように根付いていたのか、その茶の湯の場としての茶室がどうであったか」<sup>69)</sup>という視角を呈示している。きわめて詳細で実証的な研究である。権威発生の原点としての茶室は、その権威を外延的に拡大していく。その権威は茶庭や城内における二の丸にも及んでいった。寛永14年(1637年)からは、「二の丸を借用しての『数寄屋御成』がいつそうの盛行をみている」<sup>70)</sup>のである。

第7巻は中国茶文化(宋代の点茶文化)、朝鮮喫茶研究、日本の煎茶道、東南アジアの茶文化、ヨーロッパにおける東洋茶、さらには現代中国の茶史研究をとりあつかっている。高橋忠彦「宋代の点茶文化をめぐる」<sup>71)</sup>では、点茶文化の変遷を歴史的にまとめており、小川後楽「日本の煎茶道と中国歴代の茶」<sup>72)</sup>では煎茶道史研究を中国の茶文化と日本の関わりから論じていて興味深い。また濱下武志「明代以降の中国茶の歴史 対外交易を中心として」<sup>73)</sup>は、17世紀より現代に至るまでの茶貿易の歴史をまとめ、世界経済における茶の存在を検証している。経済学分野からの茶道研究がほとんどみられないなかで希有の論文であるといえよう。

第8巻は茶に科学的な分析メスを入れている。茶が現代でも一服、二服と呼ばれるのは、栄西禪師が茶を日本にもたらしたときに源実朝がその茶を飲み、病気を治したということにち



なんでのものである。当初は薬として服用されていたのが茶だった。茶の薬用効果については、鈴木良雄「茶の薬・医学と効用」<sup>74)</sup>に詳しく述べている。それによれば、「近年、茶の成分の有効性が見直され、その薬理学的・保健学的効果の解明と研究が進み、その効能が近代科学によって証明されつつある。特にわが国においては、1980年代に入ってから、茶の成分の有効性についての研究が進展し、世界の注目を集めている」<sup>75)</sup>という。そうした傾向は、抹茶の原葉であるてん茶（碾茶・点茶）の生産動向にもあらわれている。大西市造「抹茶の正体 抹茶の官能検査と理化学的性質」<sup>76)</sup>によれば、「てん茶の生産地は、愛知県と京都府であり、煎茶、番茶のように全国的なものでなく、産地は概ね二府県に限定された状態であり、1980頃まではおよそ400トン程度の比較的変動の少ない生産推移であったものが、1985年度以降年々増産傾向となり、1997年度では925トンに達した。最大の要因は周知のとおり、単に飲用のみの抹茶の時代から消費者の健康志向にまで増幅し、需要が多様化したためと考えられる。」<sup>77)</sup>のである。

第9巻では茶道と日本の和歌、狂言、俳諧、文学との関連をとりあげている。茶道が日本の精神の拠り所であるとすれば、日本の精神の言語表現である文芸との共通性は欠かせない。ことに和歌と茶の湯の関係は深いことを記している。

おわりに

本稿では武家茶である鎮信流に関する研究の基盤として、日本における代表的な茶道研究の成果を概観しようとした。まず、『茶道古典全集（全12巻）』に依りながら、中国および日本における代表的な茶書について概観した。中国茶書に関しては、茶の薬効に関する考察と禅宗寺院におけるその体系整備の様子をうかがい知ることができた。そして、日本における茶書の概観からは、中国伝来の茶が当初は中国と同様

に主として大成されていく過程が浮き彫りにされていった。こうした古典的な茶書の概観は、いかなる立場の茶道研究にとっても必須の課題であろう。

次に『茶道学体系（全10巻）』によって、多様なテーマに関する現時点での最新の研究成果を一瞥した。各テーマに関する研究論文のそれぞれは、文献的な考証や思索の深度といったような点で、まさに今日の茶道研究の基盤を成すものと言っても過言ではない。しかしながら、筆者が年来の研究テーマとしている武家茶、ことに鎮信流に関する研究という視点からすると、この網羅的な業績も決して万全とはいえないが、茶道の大きな流れは把握できる。

以上のような研究基盤の確認のうえで、茶道鎮信流そのものに関する研究が可能となるのであるが、その可能性と課題とに関しては稿を改めて考察したい。

注

- 1) 千 宗室編『茶道古典全集（全12巻）』淡交社、1956.
- 2) 『茶道古典全集（第1巻）』所収、pp. 3-118.
- 3) 原文は『茶道古典全集（第1巻）』p. 91、現代語訳は『茶道古典全集（第1巻）』p. 3.
- 4) 陸羽『茶経巻の上』『茶道古典全集（第1巻）』所収、pp. 4-5.
- 5) 『茶道古典全集（第1巻）』所収、pp. 119-136.
- 6) 神田喜一郎「『茶経』解題」『茶道古典全集（第1巻）』p. 133.
- 7) 『茶道古典全集（第1巻）』所収、pp. 191-214.
- 8) 神田喜一郎「『茶録』解題」『茶道古典全集（第1巻）』所収、pp. 215-219.
- 9) 神田喜一郎「『茶録』解題」『茶道古典全集（第1巻）』p. 215.
- 10) 『茶道古典全集（第1巻）』所収、pp. 223-258.
- 11) 神田喜一郎「『大観茶論』解題」『茶道古典全集（第1巻）』p. 259.
- 12) 『茶道古典全集（第1巻）』所収、pp. 265-369. ただしこれは、茶事にかかわる部分の抄録である.
- 13) 福島俊翁「『勅脩百丈清規』解題」『茶道古典全集（第1巻）』p. 371.

- 14) 福島俊翁『『勅脩百丈清規』解題』『茶道古典全集 (第1巻)』p. 379 .
- 15) 『茶道古典全集 (第2巻)』所収, pp. 4-71 .
- 16) 森 鹿三「喫茶養生記解題」『茶道古典全集 (第2巻)』p. 143 .
- 17) 『茶道古典全集 (第2巻)』所収, pp. 166-180 .
- 18) 魚澄惣五郎「喫茶往来解題」『茶道古典全集 (第2巻)』p. 192 .
- 19) 魚澄惣五郎「喫茶往来解題」『茶道古典全集 (第2巻)』pp. 196-197 .
- 20) 『茶道古典全集 (第2巻)』所収, pp. 284-334 .
- 21) 谷 信一「君臺觀左右帳記解題」『茶道古典全集 (第2巻)』p. 346 .
- 22) 『茶道古典全集 (第2巻)』所収, pp. 408-487 .
- 23) 赤松俊秀「御節書解題」『茶道古典全集 (第2巻)』p. 500 .
- 24) 『茶道古典全集 (第3巻)』所収, pp. 3-6 .
- 25) 永島福太郎「珠光古市播磨法師宛一紙解題」『茶道古典全集 (第3巻)』p. 10 .
- 26) 『茶道古典全集 (第6巻)』所収, pp. 51-116 .
- 27) 『茶道古典全集 (第6巻)』p. 99 .
- 28) 『茶道古典全集 (第3巻)』所収, pp. 27-106 .
- 29) 『茶道古典全集 (第4巻)』所収, pp. 3-333 .
- 30) 『茶道古典全集 (第6巻)』所収, pp. 407-469 .
- 31) 『茶道古典全集 (第6巻)』所収, pp. 3-8 .
- 32) 『茶道古典全集 (第6巻)』p. 3 .
- 33) 林屋辰三郎・村井康彦「北野大茶湯之記解題」『茶道古典全集 (第6巻)』pp. 12-13 .
- 34) 桑田忠親「山上宗二記解題」『茶道古典全集 (第6巻)』p. 117 .
- 35) 『茶道古典全集 (第6巻)』所収, pp. 133-382 .
- 36) 『茶道古典全集 (第6巻)』p. 314, 『茶道古典全集 (第6巻)』pp. 316-317, 芳賀幸四郎「宗湛日記解題」『茶道古典全集 (第6巻)』p. 387 .
- 37) 芳賀幸四郎「宗湛日記解題」『茶道古典全集 (第6巻)』p. 389 .
- 38) 芳賀幸四郎「宗湛日記解題」『茶道古典全集 (第6巻)』pp. 389-390 .
- 39) 『茶道古典全集 (第3巻)』所収, pp. 145-321. 「『草人木』は、もと木版本三冊から成り、寛永三年版を以てそのはじめと考えられている」(久田宗也「草人木解題」『茶道古典全集 (第3巻)』p. 322.)
- 40) 『茶道古典全集 (第2巻)』所収, pp. 218-260 .
- 41) 『茶道古典全集 (第2巻)』p. 243 .
- 42) 『茶道古典全集 (第5巻)』所収, pp. 3-475 .
- 43) 柴田 實「槐記解題」『茶道古典全集 (第5巻)』p. 479 .
- 44) 『茶道古典全集 (第5巻)』p. 340 .
- 45) 柴田 實「槐記解題」『茶道古典全集 (第5巻)』p. 483 .
- 46) 『茶道古典全集 (第9巻)』所収, pp. 3-454 .
- 47) 永島福太郎「松屋會記解題」『茶道古典全集 (第9巻)』p. 457 .
- 48) 永島福太郎「松屋會記解題」『茶道古典全集 (第9巻)』p. 458 .
- 49) 『茶道古典全集 (第6巻)』p. 95 .
- 50) 『茶道古典全集 (第4巻)』p. 3 .
- 51) 『茶道古典全集 (第4巻)』p. 264 .
- 52) 『茶道古典全集 (第10巻)』所収, pp. 279-310 .
- 53) 『茶道古典全集 (第10巻)』p. 279 .
- 54) 柴山全慶「禅茶録解題」『茶道古典全集 (第10巻)』p. 312 .
- 55) 千 宗室監修『茶道学大系 (全10巻)』淡交社, 1999~2001 .
- 56) 谷端昭夫「茶道史研究の歩みと展望」『茶道学大系 (第2巻)』所収, pp. 5-50 .
- 57) 谷端昭夫「茶道史研究の歩みと展望」『茶道学大系 (第2巻)』p. 50 .
- 58) 矢部誠一郎「近世大名茶の湯の展開 佐竹義宣と細川忠興」『茶道学大系 (第2巻)』所収, pp. 123-155 .
- 59) 矢部誠一郎「近世大名茶の湯の展開 佐竹義宣と細川忠興」『茶道学大系 (第2巻)』p. 124 .
- 60) 矢部誠一郎「近世大名茶の湯の展開 佐竹義宣と細川忠興」『茶道学大系 (第2巻)』p. 155 .
- 61) 渡辺 保「茶事の演劇性」『茶道学大系 (第3巻)』所収, pp. 175-209 .
- 62) 渡辺 保「茶事の演劇性」『茶道学大系 (第3巻)』p. 199 .
- 63) 渡辺 保「茶事の演劇性」『茶道学大系 (第3巻)』p. 201 .
- 64) 渡辺 保「茶事の演劇性」『茶道学大系 (第3巻)』p. 205 .
- 65) 筒井紘一「茶の湯の菓子 その成立と展開」『茶道学大系 (第4巻)』所収, pp. 289-318 .
- 66) 筒井紘一「茶の湯の菓子 その成立と展開」『茶道学大系 (第4巻)』p. 290 .
- 67) 中村利則「武家の茶室」『茶道学大系 (第6巻)』所収, pp. 65-157 .
- 68) 中村利則「武家の茶室」『茶道学大系 (第6巻)』p. 66 .

- 69) 中村利則「武家の茶室」『茶道学大系(第6巻)』  
p. 66.
  - 70) 中村利則「武家の茶室」『茶道学大系(第6巻)』  
p. 127.
  - 71) 高橋忠彦「宋代の点茶文化をめぐる」『茶道  
学大系(第7巻)』所収, pp. 53-80.
  - 72) 小川俊楽「日本の煎茶道と中国歴代の茶」『茶  
道学大系(第7巻)』所収, pp. 81-122.
  - 73) 濱下武志「明代以降の中国茶の歴史 対外交易  
を中心として」『茶道学大系(第7巻)』所収,  
pp. 123-139.
  - 74) 鈴木良雄「茶の薬・医学と効用」『茶道学大系  
(第8巻)』所収, pp. 135-167.
  - 75) 鈴木良雄「茶の薬・医学と効用」『茶道学大系  
(第8巻)』p. 137.
  - 76) 大西市造「抹茶の正体 抹茶の官能検査と理化  
学的性質」『茶道学大系(第8巻)』所収, pp.  
195-221.
  - 77) 大西市造「抹茶の正体 抹茶の官能検査と理化  
学的性質」『茶道学大系(第8巻)』pp. 198-  
199.
- 引用文献一覧(引用順)
1. 千 宗室編『茶道古典全集(全12巻)』淡交社,  
1956.
  2. 神田喜一郎「『茶経』解題」『茶道古典全集(第  
1巻)』pp. 119-136.
  3. 神田喜一郎「『茶録』解題」『茶道古典全集(第  
1巻)』pp. 215-219.
  4. 神田喜一郎「『大観茶論』解題」『茶道古典全集  
(第1巻)』pp. 259-261.
  5. 福島俊翁「『勅脩百丈清規』解題」『茶道古典全  
集(第1巻)』pp. 371-395.
  6. 森 鹿三「喫茶養生記解題」『茶道古典全集(第  
2巻)』pp. 125-162.
  7. 魚澄惣五郎「喫茶往来解題」『茶道古典全集(第  
2巻)』pp. 191-199.
  8. 谷 信一「君観覧左右帳記解題」『茶道古典全集  
(第2巻)』pp. 335-346.
  9. 赤松俊秀「御飾書解題」『茶道古典全集(第2  
巻)』pp. 488-501.
  10. 永島福太郎「珠光古市播磨法師宛一紙解題」『茶  
道古典全集(第3巻)』pp. 7-24.
  11. 久田宗也「草人木解題」『茶道古典全集(第3  
巻)』pp. 322-351.
  12. 林屋辰三郎・村井康彦「北野大茶湯之記解題」  
『茶道古典全集(第6巻)』pp. 9-35.
  13. 桑田忠親「山上宗二記解題」『茶道古典全集(第  
6巻)』pp. 117-129.
  14. 芳賀幸四郎「宗湛日記解題」『茶道古典全集(第  
6巻)』pp. 383-403.
  15. 柴田 實「槐記解題」『茶道古典全集(第5巻)』  
pp. 479-489.
  16. 永島福太郎「松屋會記解題」『茶道古典全集(第  
9巻)』pp. 457-491.
  17. 柴山全慶「禅茶録解題」『茶道古典全集(第10  
巻)』pp. 311-328.
  18. 千 宗室監修『茶道学大系(全10巻)』淡交社,  
1999~2001.
  19. 谷端昭夫「茶道史研究の歩みと展望」『茶道学  
大系(第2巻)』pp. 5-50.
  20. 矢部誠一郎「近世大名茶の湯の展開 佐竹義宣  
と細川忠興」『茶道学大系(第2巻)』pp. 123-  
155.
  21. 渡辺 保「茶事の演劇性」『茶道学大系(第3  
巻)』pp. 175-209.
  22. 筒井紘一「茶の湯の菓子 その成立と展開」  
『茶道学大系(第4巻)』pp. 289-318.
  23. 中村利則「武家の茶室」『茶道学大系(第6巻)』  
pp. 65-157.
  24. 高橋忠彦「宋代の点茶文化をめぐる」『茶道  
学大系(第7巻)』pp. 53-80.
  25. 小川俊楽「日本の煎茶道と中国歴代の茶」『茶  
道学大系(第7巻)』pp. 81-122.
  26. 濱下武志「明代以降の中国茶の歴史 対外交易  
を中心として」『茶道学大系(第7巻)』pp. 123  
-139.
  27. 鈴木良雄「茶の薬・医学と効用」『茶道学大系  
(第8巻)』pp. 135-167.
  28. 大西市造「抹茶の正体 抹茶の官能検査と理化  
学的性質」『茶道学大系(第8巻)』pp. 195-221.